

や脳動静脈奇形に由来するものがある。後者は三叉神経痛の約10～20%を占めており、かつ年齢も若年層にみられるという特徴を有している。演者らは昭和58年6月10日から昭和62年2月23日迄の約3年8カ月間に、八戸赤十字病院脳神経外科において、13例の三叉神経痛の手術を経験した。このうちの3例、23%が脳腫瘍に由来する三叉神経痛であった。更にこの3例中の1例(53才、女性)では脳腫瘍(右小脳橋角部 Epidermoid)の圧迫に加えて脳血管(AICA)による三叉神経の圧迫が認められ、脳腫瘍切除術(腫瘍重量6.6g)とMVDを施行した。本例は腫瘍性並びに血管性に起因する三叉神経痛と考えられる極めて稀有なる症例であり、現在までのところ文献上に報告例はないので、ここにその概要を報告する。

12) 三叉神経痛を主訴とした聴神経腫瘍 3例の検討

橋詰 清隆・由良 茂貴 (旭川医科大学)
大神正一郎・佐古 和廣 (脳神経外科)
田中 達也・米増 祐吉

聴神経腫瘍の多くは患側の耳鳴、難聴などの蝸牛神経症状より初発する。腫瘍の増大に伴う三叉神経の障害として顔面知覚や角膜反射の低下を認める事は多いが、典型的な三叉神経痛が見られる事はまれである。我々は典型的な三叉神経痛を主訴とした3例を経験した。いずれも症状の進行が聴神経腫瘍としては非定型であった。全例手術により顔面痛は消失した。

症例1: 60歳女性。右聴神経腫瘍。6年前から右側の耳鳴り、難聴が始まり、当科入院の3か月前より右顔面痛が出現した。神経耳科的には左右差のほとんどない両側の感音性難聴であり、右の canal palsy は認めなかった。

症例2: 46歳女性。右聴神経腫瘍。入院の9か月前より右顔面痛が出現した。自覚的な難聴は全くなかった。当初 tic douloureux として保存的治療にて経過観察したが、入院1か月前より悪化したため、三叉神経減圧術目的で入院した。CT scan で小脳橋角部腫瘍と判明した。神経耳科的には右の高音域に軽度の難聴、右の canal palsy を認めた。

症例3: 73歳女性。左聴神経腫瘍。5年前よりめまい発作が出現し、3年前より左顔面痛、左顔面神経麻痺が起った。1年前より左難聴に気付いた。

13) 椎骨脳底動脈系の走行異常と紡錘型脳底動脈瘤を有した hemifacial spasm の1例

岡 伸夫・大辻 常男 (高山医科薬科大学)
神林 智作・岩井 良成 (脳神経外科)
遠藤 俊郎・高久 晃

近年、hemifacial spasm や三叉神経痛等に対する microvascular decompression は一般的な治療となったが、椎骨脳底動脈系の走行異常による主幹動脈の圧迫は、根治治療に苦慮することが多いようである。今回我々も、椎骨脳底動脈系の走行異常に脳底動脈の紡錘型動脈瘤を有した症例を経験したので、その治療と問題点を含め報告する。症例は69歳女性で、10数年来の左 hemifacial spasm と facial palsy を有し、最近、左耳鳴、ふらつき感を伴ってきたため来院した。CT で橋前部に enhance 強陽性の楕円形の mass と、脳血管写で椎骨動脈の elongation および tortousity と脳底動脈の紡錘型動脈瘤を認めた。手術所見では、硬く太い椎骨動脈が、第7、第8両神経を強く圧迫しており、椎骨動脈は容易に移動せず、動脈瘤が近接していることもあり、その操作は困難であった。結果は prosthesis 数個の挿入により椎骨動脈を移動せしめ、術後も facial spasm の減少とその他の症状の消失をみた。1年5ヶ月後に再び hemifacial spasm の増悪をみ、更に動脈瘤よりの embolus によると思われる脳幹症状を呈した。

14) 特発性顔面痙攣・三叉神経痛と 脳動脈瘤との合併について

斎藤伸二郎・山際 修 (山形大学)
板垣 晋一・佐藤 和彦 (脳神経外科)
中井 昂

特発性顔面痙攣(HFS)46例中6例、13%に囊状脳動脈瘤(AN)の合併がみられた。この値は剖検例における AN 発見率2～5%(Sekher ら)、また当科の虚血性脳血管障害例における AN 合併率4.1%(145例中6例)に比し有意に高かった。これに対し特発性三叉神経痛(TN)55例中 AN 合併例はなかった。

合併例6例についてみると、①2例にともども膜下出血の既往があった。②4例は多発例で、6例に計13個の AN がみられた。③ AN は全て血管の分岐部にあり、IC、MC が各5個、Acom が1個、V-B系が2個とIC、MC に多かった。④3例に Willis 環の asymmetry がみられた。⑤全例に軽度～中等度の動脈硬化所見がみられた。⑥3例に高血圧の既往があった。

AN 合併率が高いことの病因を、ともに動脈硬化性の脳血管病変が基盤にあると思われる HFS と TN との